

# 安倉南遺跡

県営宝塚安倉南住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年3月

兵庫県教育委員会

# 安倉南遺跡

県営宝塚安倉南住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年3月

兵庫県教育委員会



23



37



10



40



35



36



22



59



60



W 1

## 例　　言

1. 本報告書は、兵庫県宝塚市安倉南1丁目1番他に所在する安倉南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 「安倉南遺跡」は県営宝塚安倉南住宅建設事業に伴い、兵庫県阪神・淡路大震災復興本部都市住宅部から依頼を受けて発掘調査を行ったもので、阪神・淡路人震災の復興調査として位置づけられている。
3. 発掘調査は第1次確認調査と第2次確認調査の2回を行っており、第1次確認調査は平成7年11月14日から11月15日にかけて行い、第2次確認調査は平成7年12月13日から平成8年3月8日にかけて行った。
4. 第1次確認調査の担当は中村 弘、第2次確認調査の担当は山本高照（和歌山県からの支援職員）、北原治（滋賀県からの支援職員）の2名が行い、整理作業は中村 弘が行った。
5. 遺跡調査番号は第1次確認調査が950263、第2次確認調査が950340である。
6. 遺物の接合・補強・固化・復元・写真撮影は兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所（兵庫県神戸市兵庫区荒田町）において行った。
7. 発掘調査現場での写真撮影は調査員が行い、遺物整理後の遺物写真撮影は株式会社衣川に委託して行った。
8. 第2章「周辺の遺跡」には国土地理院1998年発行の2万5千分の1図「宝塚」「伊丹」を使用し、遺跡周辺の地形図は宝塚市1971年発行の2千5百分の1図「阪神間都市計画(宝塚市)」を使用した。
9. 本書で使用したトレンチ番号、遺構番号は混乱を避けるため、調査時に使用したものをそのまま用いることとした。よって、記載のないものは欠番となっている。
10. 実測図、遺物は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
11. 本書の編集・執筆は中村 弘が行った。



第1図　遺跡の位置

# 本文目次

## 第1章 調査の経過

1. 調査に至る経緯と経過.....	1
2. 発掘調査・整理作業の体制.....	2

## 第2章 遺跡の位置と環境..... 3

## 第3章 調査の結果

1. 遺跡の概要.....	7
2. 土層.....	7
3. 各トレンチの概要	
(1) 1トレンチ.....	9
(2) 2トレンチ.....	9
(3) 3トレンチ.....	11
(4) 4トレンチ.....	11
(5) 5・6・7トレンチ.....	11
(6) 8・9・10トレンチ.....	13
4. 遺構と遺物	
(1) 桁立柱建物.....	15
(2) 柱穴.....	15
(3) 檻.....	15
(4) 土坑.....	15
(5) 井戸.....	19
(6) 溝.....	23
(7) 坑.....	25
(8) 落ち込み.....	25
(9) 包含層.....	25
第4章 まとめ.....	27

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	例言	15
第2図 周辺地形図	3	16
第3図 周辺の遺跡	4	17
第4図 字界図	6	18
第5図 トレンチ配置図	7	19
第6図 標準土層図	7	20
第7図 調査区全体図	8	21
第8図 1トレンチ北端平・断面図	9	22
第9図 2トレンチ平・断面図	10	24
第10図 3・4トレンチ平面図	11	25
第11図 5・6・7トレンチ平面図	12	25
第12図 8・9・10トレンチ平面図	13	26
第13図 捩立柱建物	14	26
第14図 柱穴出土土器		
第15図 土坑出土土器		
第16図 SK10平・断面図		
第17図 井戸平・断面図		
第18図 井戸出土土器		
第19図 SE04土木製品(1)		
第20図 SE04土木製品(2)		
第21図 清出土土器		
第22図 SD03・炉平・断面図		
第23図 落ち込み出土土器		
第24図 包含層出土土器		
第25図 石製品(1)		
第26図 石製品(2)		

## 写 真 目 次

写真1 第1次確認調査状況	1
写真2 現地説明会状況	1
写真3 調査担当支援職員	1
写真4 現地説明会状況	2
写真5 遺跡の現状(平成9年撮影)	27
写真6 現地に設置された解説板	27

## 表 目 次

表1 周辺遺跡地名表	5
表2 上器一覧表	28

## 写真図版目次

- 写真図版1 遺 跡  
上) 空堀(1949年撮影)  
下) 全景(調査前・南から)
- 写真図版2 トレンチ  
上) 1 トレンチSD01石垣(東から)  
下) 2 トレンチ東端(東から)
- 写真図版3 トレンチ  
上) 2 トレンチ中央(北から)  
下) 2 トレンチ中央(南から)
- 写真図版4 トレンチ  
上) 3 トレンチ南端(北から)  
下) 4 トレンチ南端(北から)
- 写真図版5 トレンチ  
上) 5・6・7 トレンチ全景(東から)  
下) 5・6・7 トレンチ中央(西から)
- 写真図版6 トレンチ  
上) 5 トレンチ中央(西から)  
下) 5 トレンチ東端(東から)
- 写真図版7 トレンチ  
上) 6 トレンチ全景(東から)  
下) 6 トレンチ中央(東から)
- 写真図版8 トレンチ  
上) 6 トレンチ中央(西から)  
下) 7 トレンチ全景(南から)
- 写真図版9 トレンチ  
上) 8・9・10 トレンチ全景(北から)
- 写真図版10 トレンチ  
上) 8 トレンチ全景(北から)  
下) 8 トレンチ  
SD15遺物出土状況(西から)
- 写真図版11 遺 構  
上) SE01完掘状況(西から)  
中) SE02完掘状況(東から)  
下) SE03完掘状況(南から)
- 写真図版12 遺 構  
上) SE04完掘状況(北から)  
中) SK05(北から)  
下) SK15(南東から)
- 写真図版13 遺 構  
上) SD01石垣(南西から)  
中) SK10石列・石敷(北から)  
下) SD03炉(東から)
- 写真図版14 遺物 1(土器)
- 写真図版15 遺物 2(石製品)
- 写真図版16 遺物 3(木製品 1)
- 写真図版17 遺物 4(木製品 2)

## 第1章 調査の経過

### 1. 調査に至る経緯と経過

県営宝塚安倉南住宅建設事業に先立ち、兵庫県阪神・淡路大震災復興本部都市住宅部長から、平成7年8月11日付け復住建第9号で、当該地における埋蔵文化財の確認調査の依頼があった。阪神・淡路大震災以降、住宅の建設にあたっては復興調査として位置づけられ、今回の取扱いについてもそれに準ずることとなつたため、復興調査班が確認調査を実施することとなった。

開発予定地は、かつてテニスコートとその管理小屋があったが、第1次確認調査当時にはそれらは撤去され、完全な更地の状態であった。



写真1 第1次確認調査状況

第1次確認調査では、開発計画範囲の中に7箇所のトレンチを設定した（第5図）。トレンチは2m×5mの長細い坪ぼりである。このうち、1トレンチで瓦器を含む方形の土坑、柱穴が検出されたのを始めとして、7トレンチ以外は遺物、遺構を確認することができた。

これらの成果により、当地には遺跡が存在することが明らかとなつたが、その範囲、性格については不明であるため、より詳細な遺跡の状況について把握するため、第2次確認調査を行うこととなった。

第2次確認調査は、今回の建設計画で破壊される箇所にトレンチを設定するようにつとめ、開発により遺跡が破壊されるおそれのないところは調査を行わないようにした。

また、開発行為により遺跡が直接破壊されない部分については調査する必要がないという復興調査の取扱いを適応させたため、全面調査については行っていない。よつて、今回の報告は、この第2次確認調査の成果を中心としている。



写真2 現地説明会状況



写真3 調査担当支援職員

## 2. 発掘調査・整理作業の体制

発掘調査、および整理作業については以下のとおりである。

### 発掘調査（平成7年度）

調査主体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 青木正之

調査担当 復興調査班 班長 山本三郎

技術職員 中村 弘

支援職員 山本高熙（和歌山県からの支援職員）

支援職員 北原 治（滋賀県からの支援職員）

### 遺物整理（平成10年度）

主 体 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 寺内幸治

整理作業 整理普及班 班長 岡崎正雄

主査 村上賢治

嘱託職員 前山三枝子、杉本淳子

位上篤子、津田友子、板東明子

（保存処理） 技術職員 中村 弘

嘱託職員 船木昌美、川上 緑

日々雇用職員 達藤利恵



写真4 現地説明会状況

## 第2章 遺跡の位置と環境

安倉南遺跡は、兵庫県宝塚市安倉南1丁目1番外に位置する。武庫川中流域にある当地は摂津地方の西側である西摂地域にあたり、北側には長尾山丘陵と呼ばれる平坦な丘陵が東西約7kmにわたって連なっている。この長尾山丘陵から南側に西摂平野が展開しており、当地もこの平野の中にある。

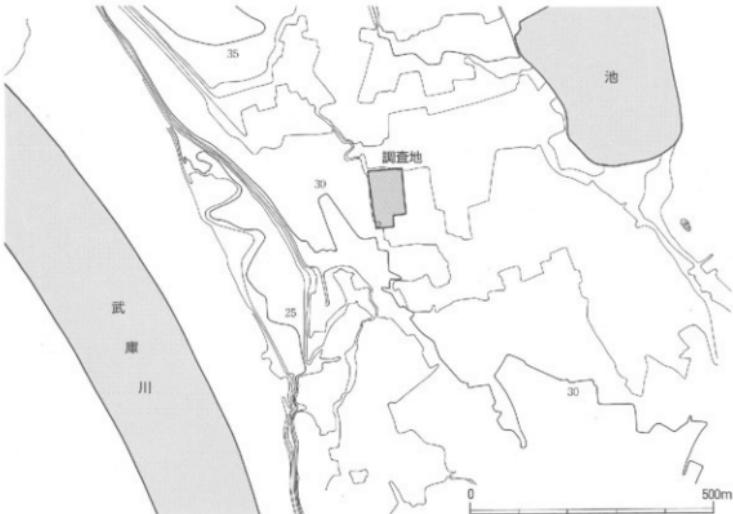
当地は武庫川の東岸の河岸段丘上に立地しており、段丘面は北側から南側に向かって緩やかに傾斜している。当地は段丘崖から東へ200mと比較的段丘崖の近くに位置しているが、段丘崖と当地の間にはさらにもう一段小さい段があり、浅い谷地形が存在する。

安倉南遺跡周辺の遺跡は、長尾山丘陵の南端と、その扇状地に多く立地している。旧石器時代の遺物は採集品、または地層から遊離した状態で認められるのみで、火山灰を伴った出土例、遺構は確認されていない。縄文時代についても同様で、安倉石鎚出土地(24)などで出土した縄文時代の石器などがある程度である。今回の調査でも縄文土器片が出土しているが、遺跡の状態がわかる資料はない。

弥生時代になると、遺跡は増大する。その傾向は縄文時代晚期から認められ、尼崎市域から伊丹台地周辺部の低地にかけて多く見つかっており、武庫川の下流域においても見つかっている。ただし、当遺跡が存在する宝塚市域では弥生時代前期に遡る資料は知られていない。中期になると、武庫川西岸の丘陵上に位置する仁川高台遺跡(29)のように高地性集落が営まれるようになる。

また、長尾山丘陵からは青銅器の出土が知られており、壳布神社遺跡(2)からは銅鏡が、中山莊園(4)からは銅鐸が2口出土している。

古墳時代に入ると、安倉高塚古墳(23)が築造される。安倉高塚古墳は現状では径約20mの円形で、主



第2図 周辺地形図



第3図 周辺の遺跡

体部は河原石積みの堅穴式石室が構築されていた。出土遺物は「赤鳥七年」の銘がある半円方形帶神獸鏡をはじめ、内行花文鏡、管玉、鉄器などがある。安倉高塚古墳が河岸段丘上に立地するに対し、万願山古墳は西浜平野を一望できる眺望のよい尾根上に築造されている。埴輪・玉頭が出土し、伝世品として石劍・琴柱形石製品・鉄鎌がある。また、中山寺に竜山石製の舟形石棺(6)の身が手水鉢として利用されており、近くにこの時期の古墳が存在する可能性が高い。長尾山古墳(14)は主体部が粘土層と考えられている。

古墳時代後期から終末期になると、長尾丘陵の尾根上から山腹にかけて多数の古墳が築造されるようになる。長尾山古墳群と総称されるこれらの古墳は、総数100基以上に及ぶ。ほとんどが終末期に築造されたもので、横穴式石室・小堅穴式石室などが主体部となっている。中筋山手古墳群(9)では複室構造の石室も認められる。これらの群集墳に混じって大型の古墳が丘陵裾部に築造されている。代表的なものは中山寺白鳥塚古墳(7)で、兵庫県下でも最大規模の横穴式石室をもつ。同袖式の石室で、全長15.2m

表1 周辺遺跡地名表

No	遺跡名	種類	主な時代	No	遺跡名	種類	主な時代
1	旧清瀬跡	集落・寺院	弥生・古代末～中世	16	平井古墳群C支群	古墳	古墳時代
2	壳布神社遺跡	散布地	弥生時代	17	菟放遺跡	散布地	弥生～平安時代
3	中山莊園古墳	古墳	古墳時代	18	荒牧畔道遺跡	散布地	奈良～平安時代
4	中山莊園鍛出土地	祭祀	弥生時代	19	荒牧戸ノ尻遺跡	散布地	奈良～平安時代
5	北米谷骨獣器出土地	墳墓	奈良時代	20	荒牧長野遺跡	散布地	古墳時代
6	中山寺舟形石棺	古墳	古墳時代	21	小浜遺跡	城跡・町並み	中世～近世
7	中山寺白鳥塚古墳	古墳	古墳時代	22	安倉南遺跡	集落	中世
8	中山寺成就院内古墳	古墳	古墳時代	23	安倉高塚古墳	古墳	古墳時代
9	中筋山手古墳群	古墳	古墳時代	24	安倉石鎧出土地	散布地	绳文時代
10	中筋山手東古墳群	古墳	古墳時代	25	西野マウンド1遺跡	堤防跡？	江戸時代
11	山本古墳群B支群	古墳	古墳時代	26	西野マウンド2遺跡	堤防跡？	江戸時代
12	天満神社古墳	古墳	古墳時代	27	西野遺跡	散布地	弥生時代
13	山本北頭内遺跡	集落	奈良～近世	28	聖心女子学院遺跡	散布地	弥生時代
14	長尾山古墳	古墳	古墳時代	29	仁川高台遺跡	集落	弥生時代
15	山本古墳群A支群	古墳	古墳時代	30	寺本堀名野神社遺跡	散布地	平安～鎌倉時代
				31	昆陽寺境内遺跡	散布地	奈良～平安時代



#### 第4図 字界図

を測る。内部には家型石棺が安置されている。また、中山莊園古墳(3)は墳丘が八角形を呈した特殊な古墳として知られている。

古墳以外には、須恵器窯である平井窯跡が2基存在する。

奈良時代には、当地の北方に位置する山本に行基が昆陽施院を設立し、仏教の布教が行われたといわれる。しかし、当該期の遺跡は多く知られていない。周辺では旧清遺跡(1)があり、須恵器、陶磁器、土師器、瓦器、黒色土器、瓦、塑像、飾金具、正頬、石硯、古鏡、石鍋など、多数の建物跡と遺物が出土した。山本北垣内遺跡(13)では据立柱建物のほか、行基が築いたと伝えられる昆陽上塗と推定される溝が検出されている。また、荒牧遺跡(17)とその周辺(18~20)では、奈良時代から平安時代の遺物の散布が認められる。これらの遺跡以外に注目される遺跡として北米谷骨脳器出土地(5)がある。出土した骨脳器は金銅製で、印籠継ぎの身と蓋からなる凝灰岩製の石櫃に埋納されていた。

中世から近世については、山本北坂内遺跡(13)で鎌倉時代の土塁墓が検出されているほか、いくつかの散布地が認められるのみで、詳細は不明である。

江戸時代の遺構としては、武庫川の旧河川堤防跡(25・26)があったが、現在は消滅している。

さて、安倉南遺跡周辺の遺跡であるが、これまででは遺物の散布のみ認められていた。遺跡から北西に約500mの地点や、北東へ約500mの地点では土師器や須恵器が採集されており、とくに前者は当遺跡と同じ立地を示す。さらに、南西へ約800mの地点(24)では縄文時代の石鏡が採集されている。しかし、いずれも散布地として知られているのみで、遺跡の内容については不明な点が多い。

〔参考文献〕 「角川日本地名大辞典」28 兵庫県 1988年

『宝塚市埋蔵文化財遺跡分布図及び地名表(改訂版)』 宝塚市教育委員会 1989年

「伊丹市埋蔵文化財分布地図」 伊丹市教育委員会 1989年

「山本北垣内遺跡」 兵庫県教育委員会 1998年

## 第3章 調査の結果

### 1. 遺跡の概要

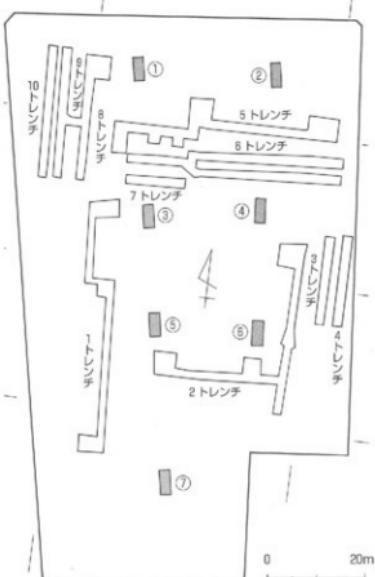
今回の調査は部分的な調査であるため、遺跡の全体については明らかではない。

今回、明らかとなった遺構は、掘立柱建物3棟、柱穴約250個、柵1列、土坑15基、井戸4基、溝15条、炉、落ち込みがある。

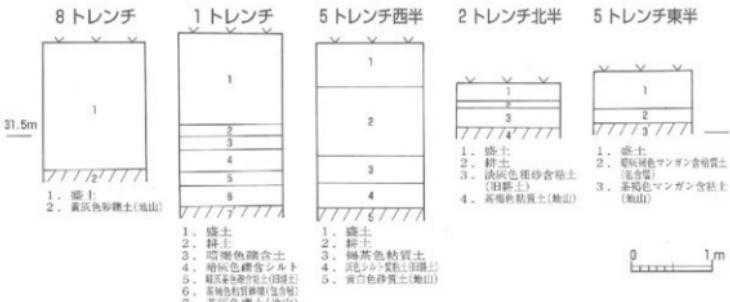
出土遺物は、土器が土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、陶器、青磁、白磁、石製品が温石、石鍋、白、木製品が呪符木箇、卒塔婆、漆塗り木皿、木鍤、杭がある。

### 2. 土層

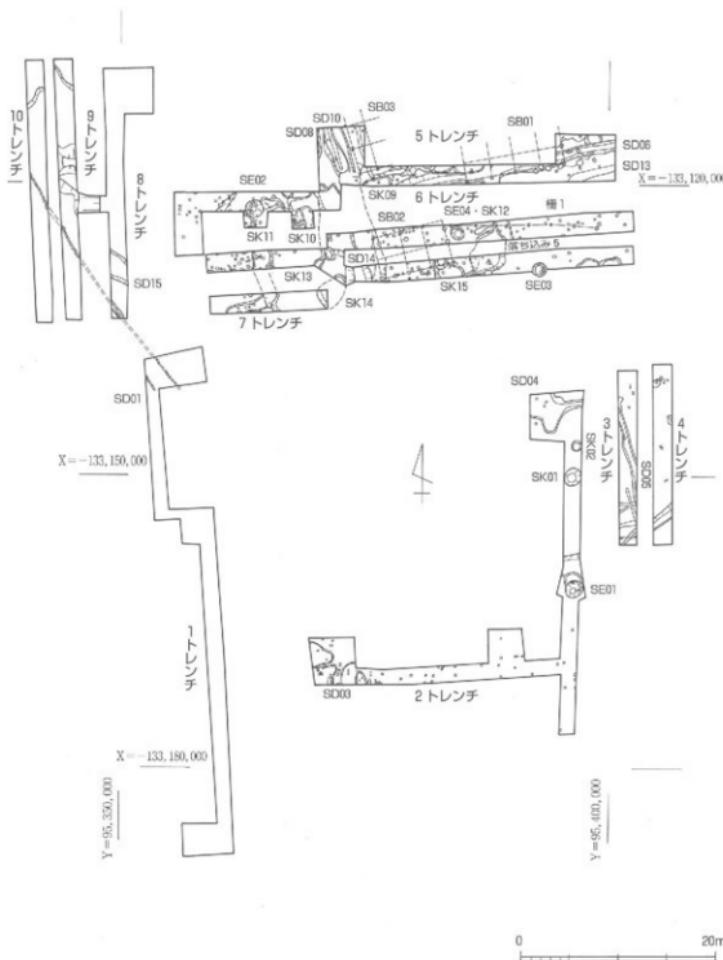
調査区の旧地形は造成により大きく改変されており、いずれの場所にも厚さ約20cm~150cmの盛土がなされていた。そのため、現地表面では1トレンチから5トレンチ西側にかけて高くなっているのに対し、遺構面では逆に1トレンチから5トレンチ西側は低く、2トレンチの北端から5トレンチの東端が高い。また、1トレンチから8トレンチにかけての調査区西側は旧地形が低くなっていることもあり、盛土は厚い。8トレンチでは盛土の直下に遺構面があり、旧地表面が大きく削平されていることがわかる。



第5図 トレンチ配置図



第6図 標準土層図



第7図 調査区全体図

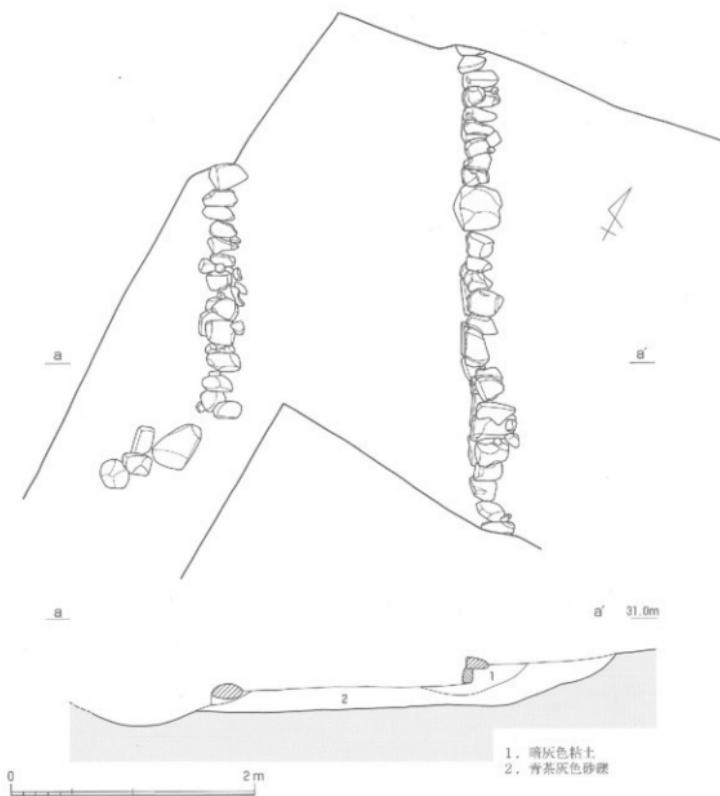
### 3. 各トレンチの概要

#### (1) 1トレンチ

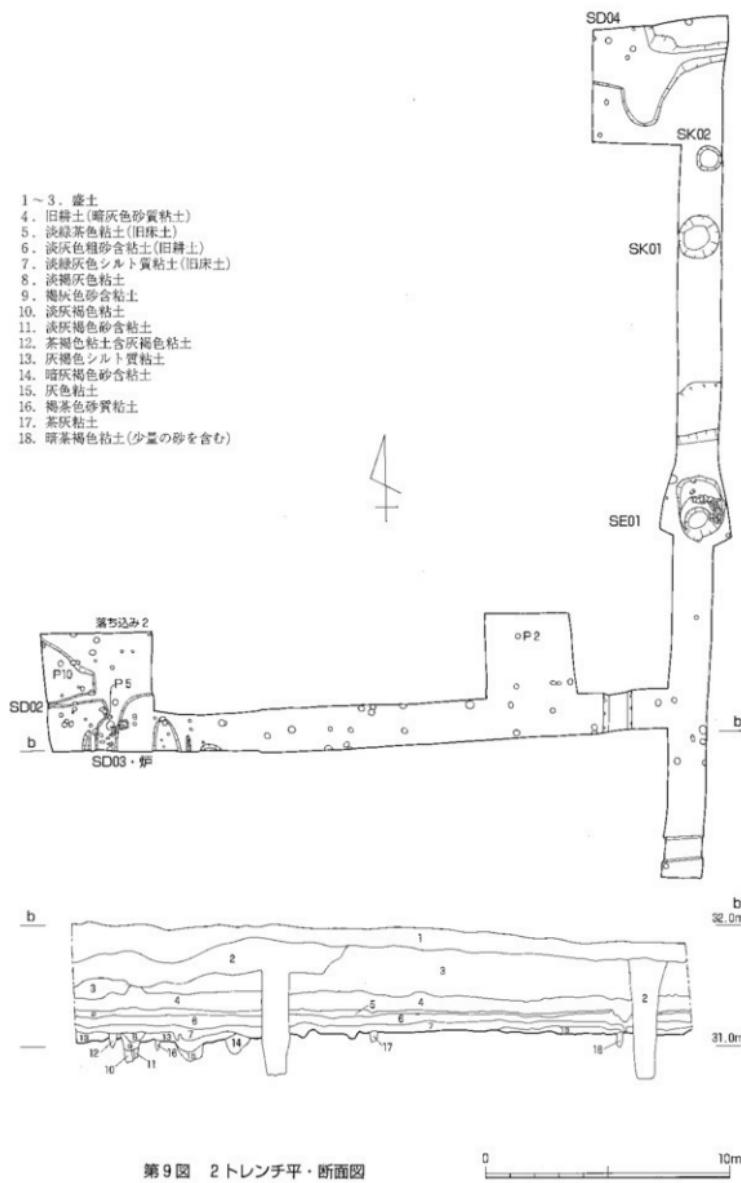
南北52.6m、東西6.7mを測る不定形のトレンチである。調査地の西端に設定した。トレンチの大部分は近代まで存続したSD01の範囲内であり、トレンチの北端部で溝1の肩を確認するにとまった。この部分の基本層序は、盛土（55cm）、耕作土（7cm）、暗褐色礫含土（8cm）、暗灰色礫含シルト（13cm）、暗灰茶色礫含粘土（中世末～近世の耕作土、8cm）、茶灰色粘質砂礫（包含層、12cm）、茶灰色礫土（地山）である。

#### (2) 2トレンチ

南北37.4m、東西26.9m、幅1.8mを測り、L字形を呈する。SE01の北側で約50cmの段差があり、



第8図 1トレンチ北端平・断面図



第9図 2 トレンチ平・断面図

トレンチの基本層序はこの地山の段差を界に分かれる。

段差より南側では地表下約90cmの地山直上で遺構が検出された。基本層序は盛土(55cm)、耕作土(15cm)、淡緑灰色シルト質粘土(旧底土、6cm)、灰褐色シルト質粘土(包含層、4cm)、茶褐色粘土(地山)であり、包含層は削平されて存在しない。また、耕作上もテニスコート等の造成によってほとんど削平されていた。

遺構は段差の南側では約60個ほどの柱穴が確認できた。トレンチが狭いこともあり、掘立柱建物として復元できるものはなかった。柱穴には根石や柱根跡をもつものも存在した。トレンチ西端にあるピット5では底付近から瓦器挽片が出土した。

段差の北側は削平が大きかったようで、比較的深いSK01、SK02、SD04と少数の柱穴が検出されただけであった。

### (3) 3トレンチ

2トレンチの東側4mに設定した幅2m、南北18mのトレンチである。基本層序は2トレンチの北半と同様である。トレンチ南端では、2トレンチと同様に地山の段落ちが確認された。遺構はSD05、柱穴、耕作痕がある。

### (4) 4トレンチ

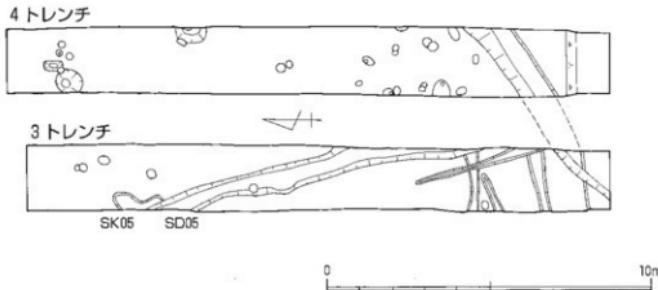
3トレンチの東側1.5mに設定した幅2m、南北18.5mのトレンチである。トレンチの南端で段落ちが確認され、少量の柱穴が検出された。

### (5) 5・6・7トレンチ

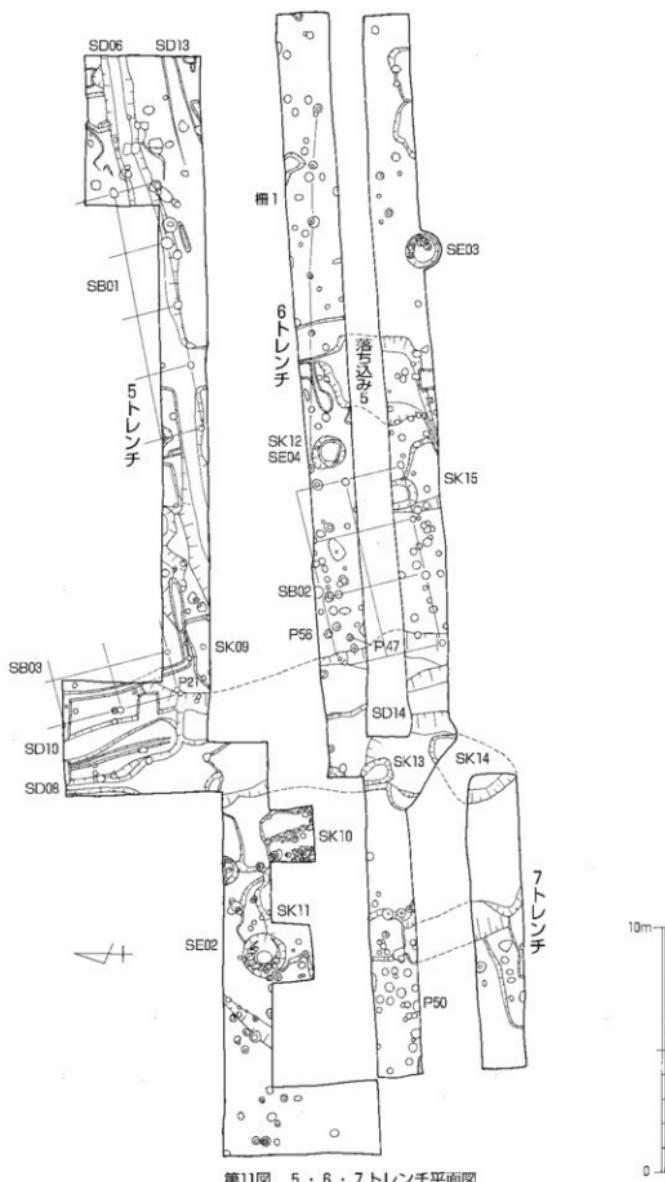
2~4トレンチの北側に設定した東西方向のトレンチである。北端の5トレンチは東西45m、幅2mを測る。6トレンチは5トレンチの南側に設定したもので、東西45m、幅2mを測る。7トレンチは6トレンチの南側2mのところに設定した。規模は6トレンチとはほぼ同じである。

これらのトレンチは中央やや西寄りにあるSD08、SD14などの南北方向の溝状の落ち込みの両側で基本層序の様相が異なる。東側では盛土(20cm)、暗灰褐色マンガン含粘質土(包含層、10cm)、茶褐色マンガン含粘土(地山)である。地山直上での標高は31.5m前後である。

溝の西側では盛土(約25cm)、耕作土(40cm)、茶褐色粘質土(15cm)、灰色シルト質粘土(旧耕作土、14cm)、黃白色砂質土(地山)であり、標高31.1m前後と、1段低くなっている。



第10図 3・4トレンチ平面図

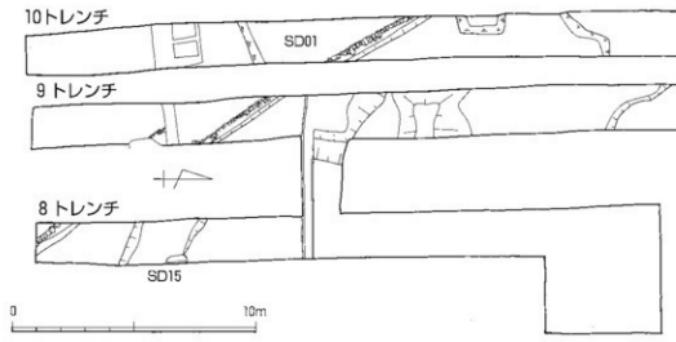


第11図 5・6・7トレンチ平面図

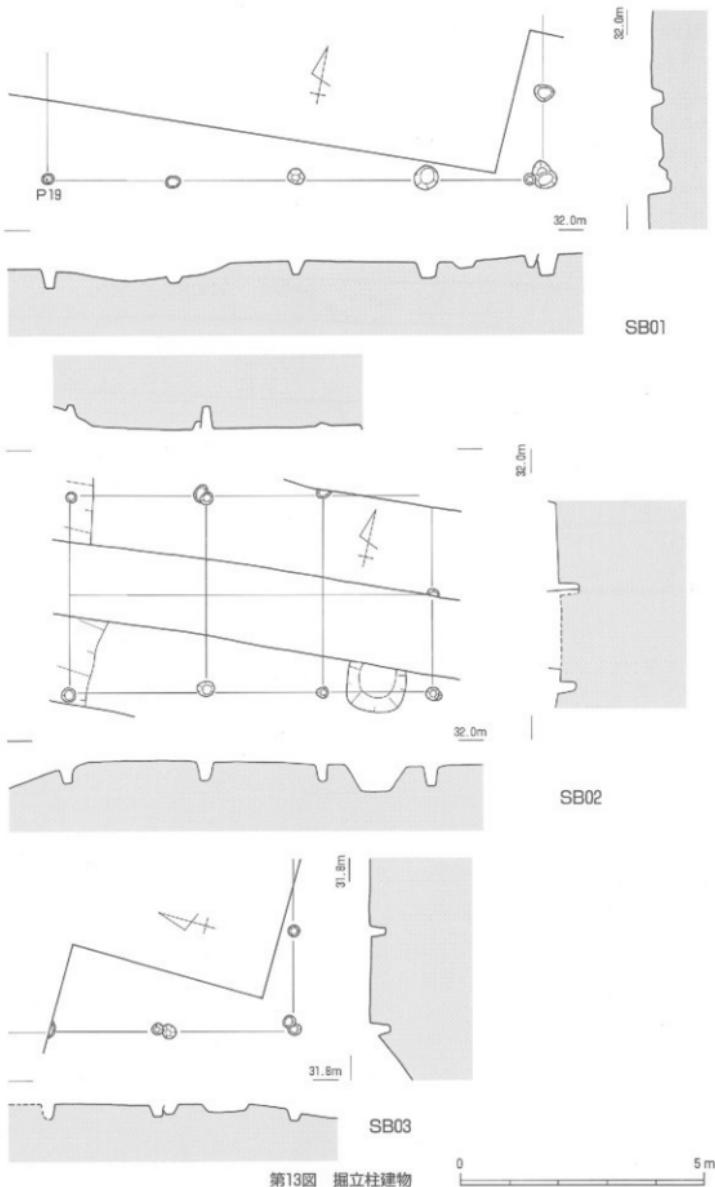
## (6) 8・9・10トレンチ

5トレンチの西側、1トレンチの北側に設定したそれぞれ南北方向に平行するトレンチである。南北26m、幅1.8mを測る。これらのトレンチ付近は造成時に削平されたようで、盛土直下で地山が確認された。

トレンチ南半では1トレンチから北西に延びるSD01が確認された。また、溝に伴う石垣も同様に検出された。



第12図 8・9・10トレンチ平面図



第13図 挖立柱建物

#### 4. 遺構と遺物

##### (1)掘立柱建物(SB)

SB01

5トレンチの東半で検出された。東西10m、南北3m以上で、4間×2間以上の掘立柱建物である。建物の主軸はN-10°-Wで、東西の柱間は2.5mを測る。南西角の柱穴(P19)からは柱が出土した。

SB02

6トレンチと7トレンチにまたがって検出された。東西7.5m、南北4m以上で、3間×2間以上の掘立柱建物である。建物の主軸はN-13°-Wで、西端の柱穴はSD14に切られている。

SB03

5トレンチの中央で検出された。東西2.8m以上、南北5m以上で、1間以上×2間以上の掘立柱建物である。南西角の一角落ちのみ検出できた。建物の主軸は、南北方向とするとN-16°-Wである。西端の柱穴はSD10に切られている。

##### (2)柱穴(P)

今回の調査区から約250個の柱穴が検出されたが、調査範囲の制限があり掘立柱建物として位置づけられたものはわずかである。特に5・6・7トレンチ中央部と2トレンチ西側に多く集中している。

いずれも直径15~20cm程度の円形で、根石がおかれているものもあった。P5・P10のように比較的大きい遺物片が出土しているものもある。

出土遺物は1~4の土器とS3の石製品のみ固化できた。1は2トレンチP5から、2は2トレンチP10から、3は5トレンチP21から、4は6トレンチP56から、S3は6トレンチP47からそれぞれ出土した。1・2は瓦器で、3・4は須恵器である。

S3は滑石製石鍋の底で、内面に縦方向のノミ状工具の痕跡が認められる。また、固化できなかったが、P2からは12~13世紀の白磁の碗が、P50からは16世紀の瀬戸の陶器が出土している。

##### (3)樋

樋1

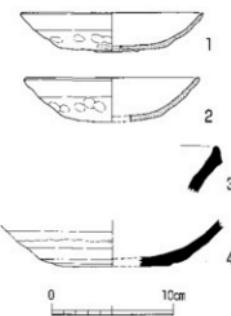
6トレンチの東端から中央にかけてほぼ東西方向に延びる。長さ15mを測り、6間である。

##### (4)土坑(SK)

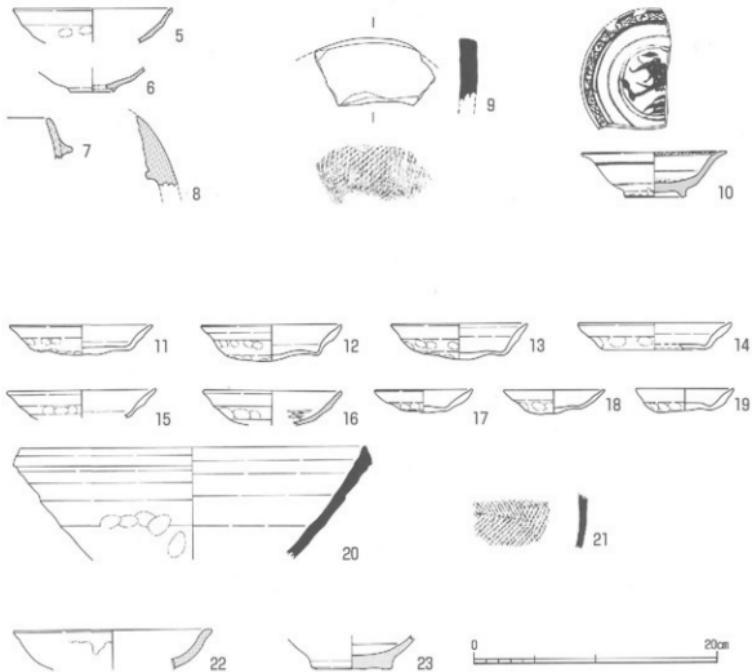
###### 土坑状窓み

1トレンチ北端で検出された。

出土遺物は5~8のみ固化できた。いずれも瓦器で、椀、羽釜、足釜がある。



第14図 柱穴出土土器



第15図 土坑出土土器

SK01

2 トレンチ北半で検出された。直径1.7m、深さ1.0mを測る円形の土坑で、断面形は台形を呈する。

SK02

2 トレンチ北半、SK01の北側で検出された。直径1.0m、深さ0.5mを測る。

SK09

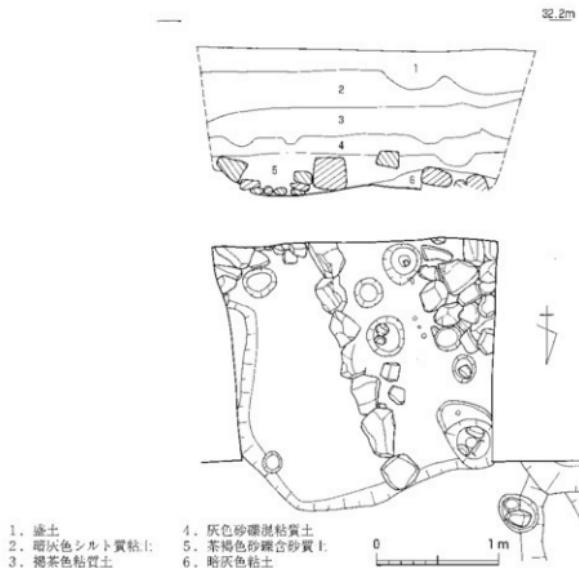
5 トレンチ中央で一部のみ検出された。

出土遺物は9の猿面鏡のみ図化できた。図の上面は丁寧に磨かれており、なめらかに円を描いている。裏面には平行叩きの痕跡が認められ、表面は使用されたため平滑になっている。

SK10(写真図版13)

5 トレンチ西側、SE02の東側で、一部分のみ検出された。深さ0.1mの浅い皿状の土坑で、土坑を分断するように南北方向の石列が設けられていた。石列の西側には、平行する杭列と石数が検出された。

出土遺物は図示できるものはなかったが、青磁が含まれており、14世紀初めのものと思われる。



第16図 SK10 平・断面図

**SK11**

5トレンチ西側、SE02に取りつくような形で一部のみ検出された。不整形な円形を呈する浅い皿状の土坑である。

出土遺物は10のみ図化できた。漳州窯染め付け碗で、具須手である。内面底には草魚文が描かれる。底部外面は施釉されておらず、淡赤褐色を呈す。図化できなかったものに、偏前焼り鉢がある。

**SK12**

6トレンチ中央で検出された。SE04と重なっていることから、井戸の埋土である可能性もある。

出土遺物は11~21のみ図化できた。11~19は上師器皿でやや大型の11~16と、やや小型の17~19がある。口縁部はナデにより仕上げられ、体部下半には指頭圧痕が残る。20・21は須恵器で、21には綾杉文の叩きが観察できる。

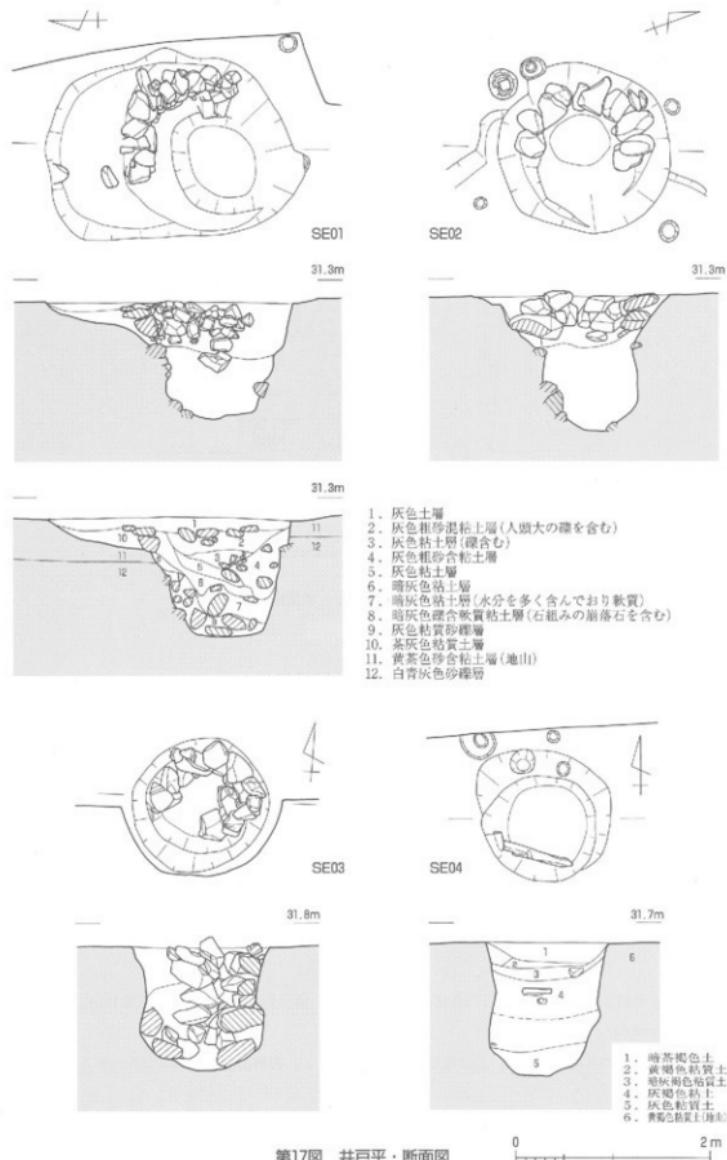
**SK13**

6トレンチ西よりで検出された。SD14と重なっている。梢円形を呈しており、長軸13cm、短軸80cm、深さ70cmを測る。

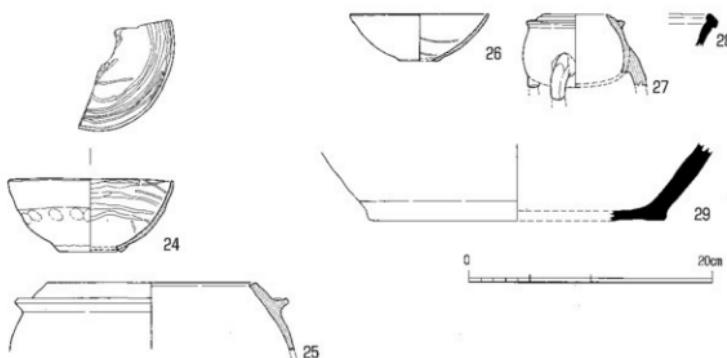
出土遺物は22のみ図化できた。22は龍泉窯系の青磁である。器壁が厚く、口縁は外反する。内外面は灰かぶりが著しい。

**SK14**

6トレンチと7トレンチにまたがって検出された。全体の形は不明である。



第17図 井戸平・断面図



第18図 井戸出土土器

出土遺物はS4のみ図化できた。石臼の上臼である。また、図化できなかったものに景德鎮窯系染め付けの碗がある。ほたん唐草文の変形した文様が認められる。

#### SK15(写真図版12)

6トレンチで南半分のみ検出された。直径1.2m、深さ0.6mを測る上坑で、断面形は台形を呈する。上坑内は人頭大の石材で埋められていた。

出土遺物は23の白磁碗のみ図化できた。

#### (5)井 戸(SE)

##### SE01(写真図版11)

2トレンチで検出された円形の石組井戸で、断面形は逆台形を呈する。直径1.85m、深さ1.2mを測る。石組は地山の礫層上面から積まれており、井戸内部は多量の石で埋まっていることから、使用中に南西側から崩落したと考えられる。

出土遺物は24・25のみ図化できた。24は瓦器碗である。体部上半の内面に横方向の暗文が認められる。また内面底部付近にも不定方向の暗文が認められる。25は瓦質の羽釜である。これら以外に、同安窯系青磁皿59(巻頭カラー)などがある。

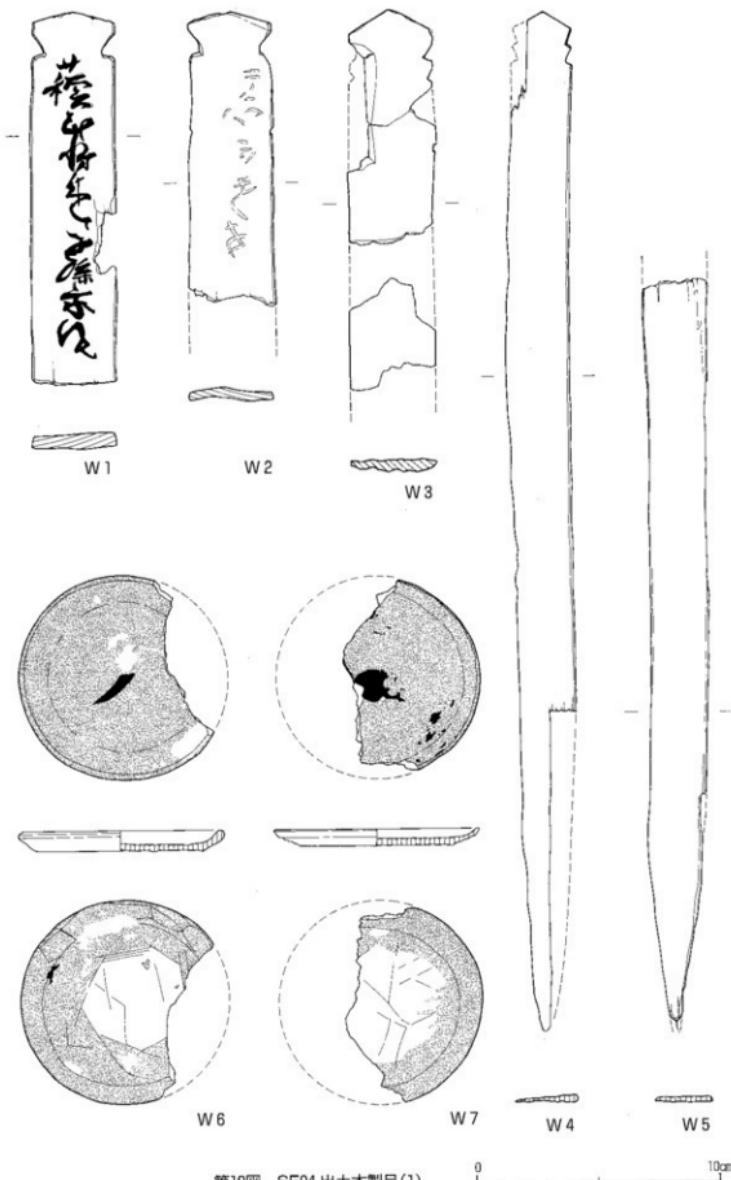
##### SE02(写真図版11)

5トレンチの西半部で検出された円形の石組井戸である。直径1.8m、深さ1.37mを測る。石組は地表下約50cmにある礫層上面から積まれているが、南東側が崩れていた。井戸は多量の石材で埋まっており、石組の崩落によって廃棄されたものと考えられる。埋土除去後、現在でも湧水が認められた。

出土遺物は26~29のみ図化できた。26・27は瓦器である。26は残りが悪く、暗文がわずかに観察できるのみである。27は小型の三足釜で、外面は口縁部以外全体に煤で覆われている。28・29は須恵器こね鉢である。

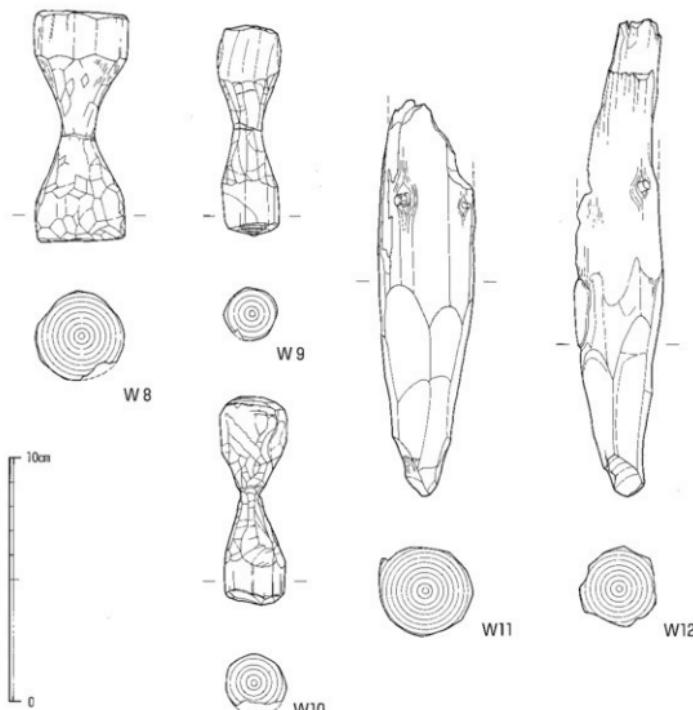
##### SE03(写真図版10)

7トレンチの東端付近で検出された円形の石組井戸である。直径1.3m、深さ1.25mを測る。石組み



第19図 SE04 出土木製品(1)

0 10cm



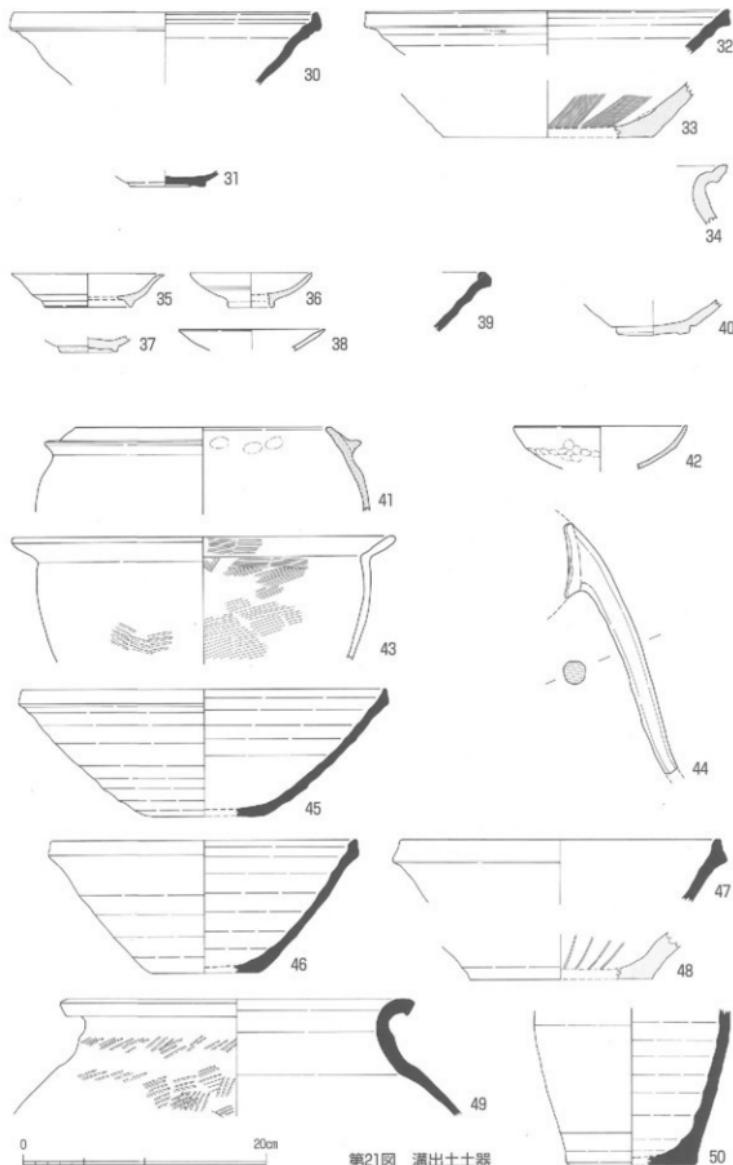
第20図 SE04 出土木製品(2)

は井戸の底から積み上げられており、南西側からずり落ちるように内側へ崩壊していた。井戸内は多量の石材で埋まっており、遺物はほとんど出土しなかった。

#### SE04(写真図版12)

6トレンチの東半で検出された円形の素掘り井戸である。直径1.25cm、深さ1.38cmを測る。埋土は大きくみて暗茶褐色土・黄褐色粘質土の上層と、暗灰褐色粘質土・灰褐色粘土・灰色粘質土といった水分を多く含む粘質の下層に分かれる。竹の根などの植物遺体を多く含む灰褐色粘土層の下半からは呪符木箇2点、木鍤3点、漆器皿2点、卒塔婆、曲物片、板材などが出土した(W1~12)。

出土遺物はW1~W12の木製品がある。W1は「蘇民将来之子孫家門也」と書かれた呪符木箇である。W2は遺存状況が悪いものの、墨痕からW1と同様であると考えられる。W3・4は上端が2段にくびれた卒塔婆と考えられる。W5についても同じ形状であることから卒塔婆と考えられる。いずれも墨書きは確認できない。W6・7は漆器皿である。黒漆を底部以外に塗っており(図の網目部分)、不定方向の塗りの痕跡が認められる。底部の漆がない部分には木地の加工痕が認められる。いずれも内面に朱漆が認められる(図の黒部分)。W8~10は木鍤である。中央のえぐられた部分には、いずれも細かい



第21図 溝出土土器

加工痕跡が認められる。W11・12は杭である。先端のみ残存する。

なお、これらの木製品以外に土器が出土しているが、同じ場所で検出されたSK12と同一である可能性が高いため、第15図に掲載している。

#### (6)溝(SD)

##### SD01

1・8・9・10の各トレンチで検出された。幅1.8m以上、長さ75m以上、深さ86cmを測る。埋土は暗灰色粘土～シルトが主体である。上層にはガラス片、陶磁器などが含まれていた。溝埋土直上に造成の際の盛土が存在することから、造成に伴って廃棄されたものと考えられる。

溝の西側の肩からは石垣が検出された。1トレンチでは2列が平行しているのが確認できる。細長い円錐を小口積みにしており、最も残りのよい10トレンチでは5段以上が確認できる。

この石垣の位置は明治初期の字図の境界線とほぼ一致しており、少なくとも明治時代には存在したものと考えられる。

なお出土遺物には17世紀前～中頃の唐津の皿が出土している。灰釉で、砂目が確認できる。

##### SD03

2トレンチの西側で検出された。幅80cm、深さ24cmを測る浅い溝である。SD02および落ち込み2との切り合い関係は確認できなかった。溝内からは炉が検出されており、それに付随する施設である可能性もある。

出土遺物は30とS5のみ図化できた。30は須恵器のこね鉢である。S5は2トレンチSD03、炉付近から出土した滑石である。滑石製の石鏡を転用したもので、なめらかに湾曲している。

##### SD04

2トレンチの北端で検出された。東西に延びる深さ5cm程度の浅い溝で、西側が不定型に広がっている。3トレンチのSD05とつながる可能性がある。出土遺物には黒色土器、土師器、須恵器碗などがあるが、瓦器は確認できなかった。

##### SD05

3トレンチ中央で検出された。幅0.7m、深さ5cm程度の浅い溝で、長さは10m以上である。

出土遺物は31のみ図化できた。須恵器の底部片である。低い平高台で、回転糸切りである。この他に黒色土器が出土している。

##### SD06

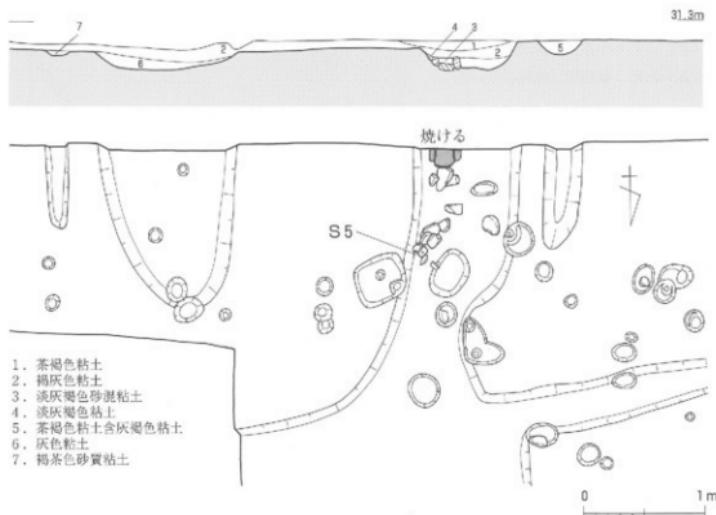
5トレンチ東半で検出された東西方向の溝で、幅1.6m、深さ0.35m、長さ21.4mを測る。断面形は台形を呈する。北側から人頭大の石材が落ち込んだ状況が看守できる。

出土遺物は32～34が図化できた。32は須恵器こね鉢、33は陶器のすり鉢で橙色を呈する。34は丹波の壺の口縁部片で、焼きが悪いため軟質で灰褐色を呈する。

##### SD08

5トレンチ中央で検出された。南北に平行する溝の一つである。南側はSD14とつながる可能性がある。

出土遺物は35～38のみ図化できた。35は白磁で端反口縁をもつ。36は灰白色の施釉陶器である。体部外面に浅い沈線が2条巡る。37は白濁釉の陶器である。38は土師器皿である。



第22図 SD03・炉、平・断面図

## SD10

5 トレンチ中央で検出された。SD08と平行する南北方向の溝である。

出土遺物は39の須恵器鉢の口縁片のみ図化できた。

## SD13

5 トレンチ東端で検出された。SD06と平行する。

出土遺物は40のみ図化できた。40は灰釉陶器で、瀬戸である。

## SD14

6 トレンチで検出された南北方向の溝である。部分的に深い土坑状の窪み（SK13・14）がある。人頭大の石材で埋められていた。出土遺物には陶磁器などがあり、それらから時期は16世紀頃と考えられる。

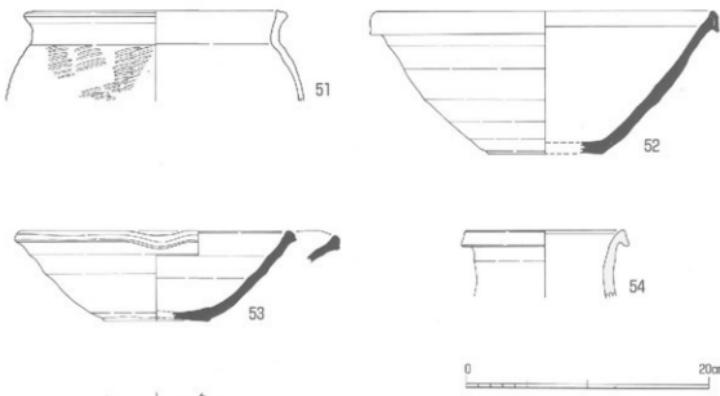
## SD15(写真図版10)

8 トレンチ南半で検出された東西方向の溝である。幅2.2m、深さ0.5mを測る。

出土遺物は41~50のみ図化できた。41は瓦器羽釜、42は瓦器碗、43は土師器鍋、44は瓦器足釜、45~47は須恵器こね鉢、48は丹波のすり鉢、49は須恵器甕、50は須恵器壺である。

## (7)炉

2 トレンチのSD03内で検出された。トレンチの南壁に接しているため、全体の状況は不明であるが、「コ」字形に組まれた3石が検出された。組まれた部分は幅14cm、長さ15cm、高さ5cmを測る。これらの石は上面が焼けており、また周辺からも焼けた石が出土している。それらの石に混じって温石（S 5）や東播系須恵器（30）が出土した。



第23図 落ち込み出土土器

## (8) 落ち込み

## 落ち込み 5

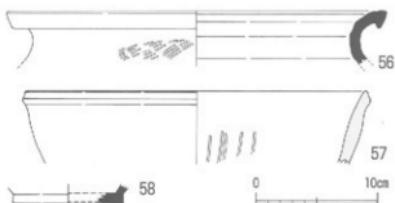
6トレンチ中央付近で確認された。南北4.2m、東西3.6m、深さ0.3mを測る不整形の落ち込みで、南北に細長い溝が取りつく。人頭大の石材で埋められていた。

出土遺物は51～55のみ固化できた。51は上鉢器の鍋、52は須恵器こね鉢、53は須恵器片口鉢、54は陶器の壺、55は瓦器純で、底部付近に1方向の暗文が認められる。

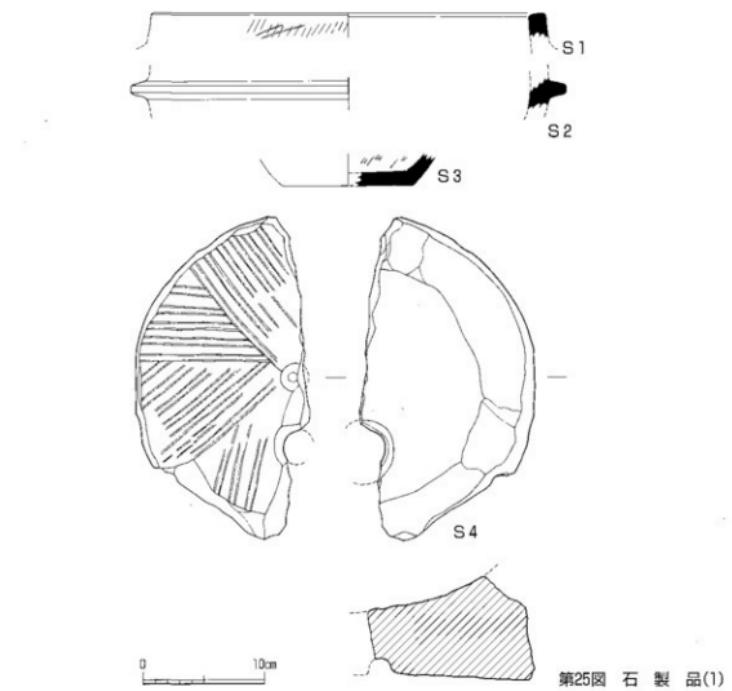
## (9) 包含層

包含層から出土した遺物のうち固化できたのは56～58、S1・2・4・6のみである。56は2トレンチから出土した須恵器壺、57は5トレンチから出土した陶器すり鉢、58は4トレンチから出土した須恵器碗である。また、2トレンチから龍泉窯系青磁60(巻頭カラー)も出土している。

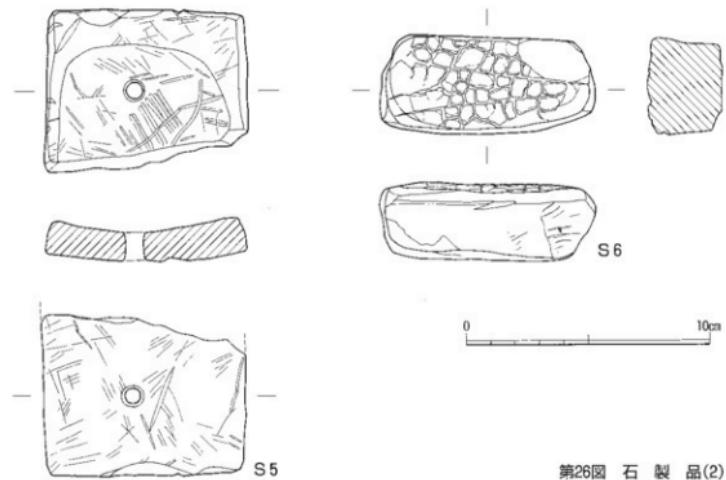
S1は滑石製石鍋の口縁部である。5トレンチ包含層から出土した。外面に縱方向と斜め方向にノミ状工具の痕跡が認められる。S2は滑石製石鍋の鍋の部分である。4トレンチ包含層から出土した。S4は石臼。S6は砂岩製の不明遺物で、上面は焼け、長側面は磨かれている。



第24図 包含層出土土器



第25図 石 製 品(1)



第26図 石 製 品(2)

## 第4章 まと め

1. 安倉南遺跡は兵庫県宝塚市安倉南1丁目1番外に位置する。
2. 遺跡の位置する字名は、烟垣内である。
3. 第1次確認調査と第2次確認調査の2回を行い、調査面積はそれぞれ70m<sup>2</sup>、830m<sup>2</sup>である。
4. 第2次確認調査によって検出された遺構は、掘立柱建物3棟、柱穴約250個、欄1列、土坑15基、井戸4基、溝15条、炉、落ち込みがある。
5. 出土遺物は、土器が土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、陶器、青磁、白磁、石製品が温石、石鍋、白、木製品が呪符木筒、卒塔婆、漆塗り木皿、木錘、杭があり、図化している。
6. また、図化できなかつた遺物として縄文土器、サヌカイト片、黒色土器片がある。
7. 遺跡の時代は12世紀から14世紀を中心とする時期と、16世紀から17世紀を中心とする時期の二時期に分けることができる。
8. 部分的な調査であるため、遺跡の全体像、変遷などは不明である。
9. 出土土器には、東播系の須恵器、備前、丹波、唐津の陶磁器、中国製輸入陶磁器があり、中世から近世における土器の流通の一様相がうかがえる。
10. 安倉地域からは、これまで奈良時代から平安時代の須恵器が採集されているが、今回の調査では当該期に属する遺構は検出されておらず、遺物量も極めて少ない。



写真5 遺跡の現状（平成9年撮影）



写真6 現地に設置された解説板

表2 土器一覧表（かっこ内は現存値）

報告No	口径	器高	腹径 底径	種類	器種	トレンチ	遺構
1	14.8	3.2	3.3	瓦器	楕	2	P 5
2	14.15	3.5	—	瓦器	楕	2	P 10
3	—	(3.9)	—	須恵器	こね鉢	5	P 21
4	—	(3.8)	—	須恵器	こね鉢	6	P 56
5	12.86	(2.8)	—	瓦器	楕	1	土坑状落ち込み
6	—	(1.9)	3.55	瓦器	楕	1	土坑状落ち込み
7	—	(3.35)	—	瓦器	羽釜	1	土坑状落ち込み
8	—	(6.6)	—	瓦器	三足釜	1	土坑状落ち込み
9	—	(5.2)	—	須恵器	猿面鏡	5	S K09
10	11.85	3.7	5.0	磁器	皿	5	S K11
11	11.6	2.50	8.25	土師器	皿	6	S K12
12	11.45	3.0	7.6	土師器	皿	6	S K12
13	11.0	2.90	7.7	土師器	皿	6	S K12
14	12.45	2.2	8.6	土師器	皿	6	S K12
15	12.15	(2.3)	—	土師器	皿	6	S K12
16	11.25	(2.8)	—	土師器	皿	6	S K12
17	7.9	1.9	3.85	土師器	皿	6	S K12
18	8.2	2.0	4.4	土師器	皿	6	S K12
19	8.0	1.9	4.2	土師器	皿	6	S K12
20	28.25	(9.2)	—	須恵器	こね鉢	6	S K12
21	—	(4.1)	—	須恵器	甕	6	S K12
22	16.1	(3.3)	—	磁器	楕	6	S K13
23	—	(2.8)	6.6	磁器	楕	7	S K15
24	13.3	5.8	5.0	瓦器	楕	2	S E01
25	17.05	(5.6)	—	瓦器	羽釜	2	S E01
26	10.35	3.86	3.4	瓦器	楕	5	S E02
27	5.15	5.9	—	瓦器	三足鍋	5	S E02
28	—	(2.6)	—	須恵器	こね鉢	5	S E02
29	—	(6.25)	24.1	須恵器	こね鉢	5	S E02
30	24.8	(5.9)	—	須恵器	こね鉢	2	S D03
31	—	(1.2)	6.15	須恵器	底部	3	S D05
32	29.6	(3.6)	—	須恵器	こね鉢	5	S D06
33	—	(4.5)	17.2	陶器	すり鉢	5	S D06
34	—	(3.7)	—	陶器	甕	5	S D06
35	12.3	12.75	7.05	磁器	皿	6	S D08
36	9.9	2.85	3.8	施釉陶器	皿	5	S D08
37	—	(1.3)	4.6	施釉陶器	底部	5	S D08
38	11.95	(1.7)	—	土師器	皿	5	S D08
39	—	(4.9)	—	須恵器	こね鉢	5	S D10
40	—	(2.9)	5.9	施釉陶器	楕	5	S D13
41	20.56	(7.0)	—	瓦器	羽釜	8	S D15
42	13.95	(3.5)	—	瓦器	楕	8	S D15
43	31.0	(10.2)	—	土師器	鍋	8	S D15
44	—	(21.9)	—	瓦器	三足鍋	8	S D15
45	29.8	10.35	10.0	須恵器	こね鉢	8	S D15
46	24.95	10.8	9.0	須恵器	こね鉢	8	S D15
47	26.15	(5.2)	—	須恵器	こね鉢	8	S D15
48	—	(3.8)	15.0	陶器	すり鉢	8	S D15
49	27.9	(9.6)	—	須恵器	甕	8	S D15
50	—	(12.8)	10.3	須恵器	甕	8	S D15
51	20.0	(7.4)	—	土師器	鍋	7	落ち込み
52	27.55	11.7	9.5	須恵器	こね鉢	7	落ち込み
53	21.8	7.3	8.4	須恵器	片口鉢	7	落ち込み
54	12.9	(5.5)	—	陶器	壺	6	落ち込み
55	—	(2.1)	4.7	瓦器	底部	6	落ち込み
56	30.85	(4.4)	—	須恵器	甕	2	包含層
57	27.8	(5.95)	—	陶器	すり鉢	5	包含層
58	—	(1.75)	8.9	須恵器	底部	4	SE01
59	—	—	—	磁器	皿	2	包含層
60	—	—	—	磁器	体部	2	包含層

# 写 真 図 版



空撮（1949年撮影）



全景  
(調査前・南から)



1 トレンチSD01  
石垣（東から）



2 トレンチ東端（東から）



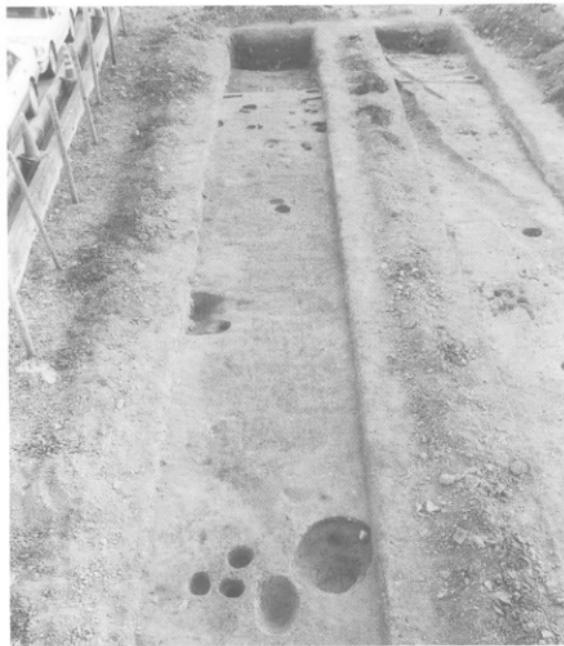
2 トレンチ中央  
(北から)



2 トレンチ中央 (南から)



3 トレンチ南端（北から）



4 トレンチ南端（北から）



5・6・7 トレンチ  
全景（東から）



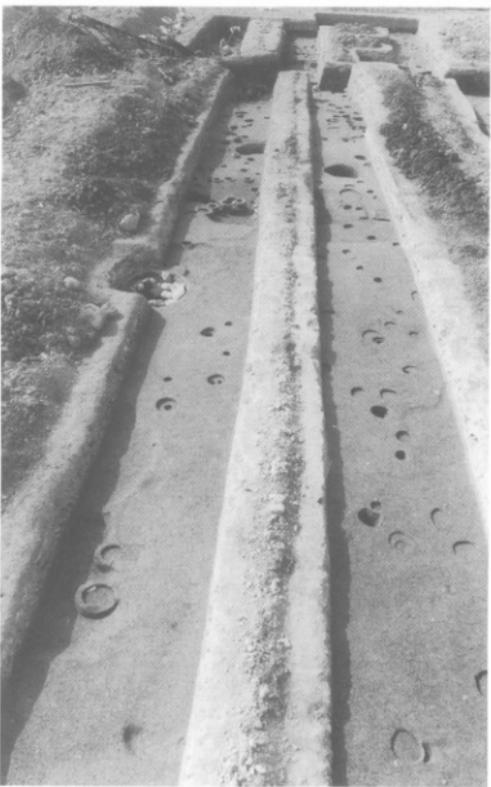
5・6・7 トレンチ  
中央（西から）



5 トレンチ中央  
(西から)



5 トレンチ東端  
(東から)



6 トレンチ全景（東から）



6 トレンチ中央  
(東から)



6 トレンチ中央  
(西から)



7 トレンチ (南から)



8・9・10 トレンチ全景  
(北から)



8 トレンチ全景  
(北から)



8 トレンチSD15  
遺物出土状況  
(西から)



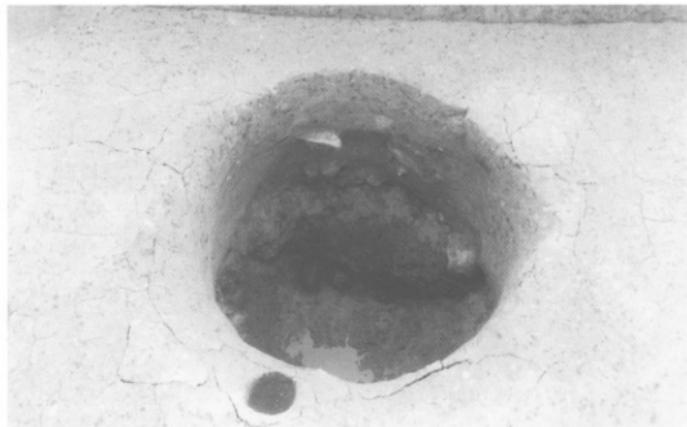
SE01完掘状況  
(西から)



SE02完掘状況  
(東から)



SE03完掘状況  
(南から)





SK10石列・石塁  
(北から)



SD01石塁  
(南西から)



SD03炉 (東から)



2



9



11



12



13



14



17



18



19



24



27



|



33



44



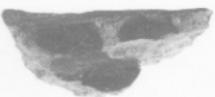
46



52



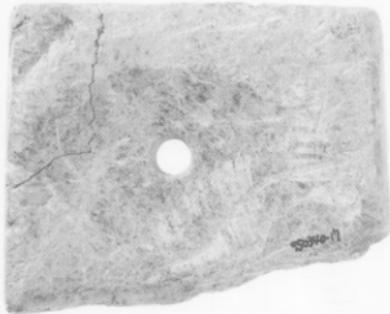
S 1



S 2



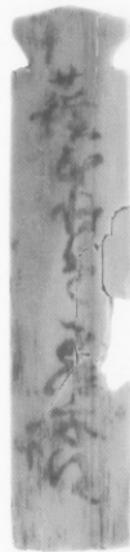
S 3



S 5



S 6



W1



W2



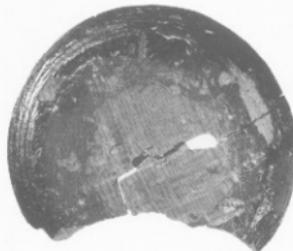
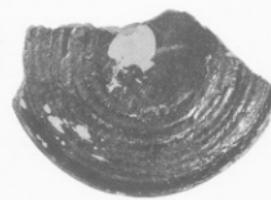
W3



W4



W5



W6



W7



W8



W9



W10



W11



W12

## 報告書抄録

ふりがな	あくらみなみいせき
書名	安倉南遺跡
副書名	県営宝塚安倉南住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第188冊
編著者名	中村 弘
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL. 078-531-7011
発行年月日	西暦1999(平成11)年3月31日

所収 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
あくらみなみ 安倉南	兵庫県宝塚市 安倉南1丁目		950263 950340	34° 47' 43"	135° 22' 34"	19951114 19951115 19951213 19960308	70m <sup>2</sup> 830m <sup>2</sup>	県営宝塚安 倉南住宅建 設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安倉南	集落跡	中世	掘建柱建物 土坑 井戸 溝	陶器 磁器 須恵器 土師器 瓦器 木器	輸入陶磁 呪符木簡

兵庫県文化財調査報告 第188号

## 安倉南遺跡

—県営宝塚安倉南住宅建設事業に伴う発掘調査報告書—

平成11年3月31日発行

調集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号  
TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会  
〒652-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 船場印刷株式会社  
〒670-0994 姫路市定元町4-2